

合宿、学会発表、他者視点…、ゼミから多くのものを得た大学生活。

1905年、愛知淑徳女学校誕生。1975年に文学部だけの4年制大学が開学し、1995年には現代社会学部が加わると共に男女共学体制へ。そして2000年、コミュニケーション学部と文化創造学部が新設され、大学は4学部体制へと拡大しました。卒業生に学園の思い出を語っていただくシリーズの第21回は、コミュニケーション学部の第1回卒業生、村井一弘さんの登場です。

シリーズ
21

百周年を迎えて



愛知淑徳大学コミュニケーション学部コミュニケーション心理学科第1回卒業生(平成15年度卒業)
村井一弘さん

昭和55年生まれ。現在30歳。富山県出身。高校卒業後、関西電力に入社するが1年半で退社し、愛知淑徳大学へ進学。在学中は映画研究会に所属、代表を務める。卒業後は、本学心理学研究科の大学院科目等履修生となるが半年後に帰郷。北日本放送の子会社、(株)KNBEで映像制作の仕事に携わる。現在は、趣味で撮っている写真の個展を計画中。また映画制作を目指して台本を執筆している。

高校を出ていったん就職しましたが、将来に夢が持てずに悩んでいた時、会社のカウンセラーの先生に相談したら、気持ちが悪くなりました。こんな仕事があるんだと心理学に興味を持ち、心理学を学べる大学を探したら、ちょうど愛知淑徳大学にコミュニケーション心理学が新設されると。愛知県にゆかりはありませんでしたが、自分と同じく大学も新しいスタートを切るということで縁を感じ、受験しました。以前は女子大だと知らず、受験の時にバスに乗ったら女子ばかりで驚きましたね。

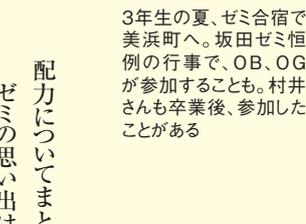
思い出に残っている場所はいろいろあります。コミュニケーションホールの食堂のおばちゃんに、メニューになったり、緑楓館で友達ピアノを弾くのを聞いたり、プラザ棟にあったモスバーガーで売れ残ったハンバーガーを半額ぐらいで買って、それをつまみに友人たちと下宿で飲んだのも懐かしい思い出です。

授業は、1期生ということもあり、先生方の指導がとても丁寧で、学生一人ひとりに対して教育が行き届いているという実感がありました。入学してから、心理学は心の問題だけでなく、人間の知覚や脳など幅広く扱うことを知りました。専門に進む前に、心理学のさまざまな領域を学べたのはよかったです。

最初は臨床に進むつもりでしたが、坂田(陽子)先生の授業で発達心理学に興味を持ち、坂田ゼミに入りました。先生は大学に赴任したばかりで、気取らない人柄もいなど。卒論は幼稚園やシルバー人材センターへ出かけて実験データを取り、注意分散ができて、コミュニケーション力が鍛えられたと思います。



卒業式、坂田先生を囲んで。ゼミ生十数人のうち、男子学生は3人だけだった。上段中央が村井さん。坂田先生は今年4月から心理学部教授に



3年生の夏、ゼミ合宿で美浜町へ。坂田ゼミ恒例の行事で、OB、OGが参加することも。村井さんも卒業後、参加したことがある



今年3月、坂田先生の教授昇進を祝って、歴代ゼミ生が駆けつけた

今年の春には坂田先生が教授になられたお祝いに、1期生から今のゼミ生まで約70人が集合。そういうつながりがずっと続いているのが、坂田ゼミのすごいところだと思います。将来、研究者になるのを目指して他大学の大学院を受けましたが落ちてしまい、卒業後は愛知淑徳の大学院心理学研究科の履修生になりました。でもこのままでいいのかと壁にぶち当たり、半年後、自分を見つめ直すためにいったん富山に戻りました。

そこで中学校の頃から映像が好きだったことを思い出して、テレビ番組の制作会社に「仕事ないですか」と飛び込んだら運よく採用されました。撮影助手からカメラマン、ディレクターになり、現在は企業紹介の番組制作などを行っています。経営者にインタビューしたり、機密事項の多い場所に入ったりと、普通なら体験できないことを広く浅く体験できるのは面白いですね。

初対面の人と仕事をするのが多いのですが、ストレスは感じません。「こうしたら、こう思ってもらえるかな」と、常に相手の立場で考える力がゼミで身に付いたからだと思います。

大学で使っていた心理学のテキストはもちろん、新たに買って読んでいるものもあります。心理学というのは人の生活に死ぬまで結び付いている学問なので、それを学んだことで自分の生活や考え方が豊かになったと実感しています。(談)